

ふゆう

來須凜太郎

ふゆう。

温泉に、我が身を預けた時の感覚をそう名付けた。

その日、勤務終了とともに、衝動的にふゆうがほしくなった。

ゆえに、近くも遠くもない温泉付きの旅館へと足を運び、急遽湯治と洒落込むことに相成ったのである。

物事には順序がある。

客室に荷物を置き、足早に大浴場へと向かい下駄箱にスリッパを突っ込む。

勤労を纏う服を脱皮の如く一挙に脱ぎすて、逸る気持ちを抑えつつ大浴場の扉を開く。
身体を洗ってからさあ真打登場——湯船へざぶん。

デスクワーカーのため通勤ぐらいしか稼働させることのない錆び付いた身体が一時の翼を得て、一呼吸とともに一瞬地を離れ、ゆっくりとゆっくりと着地する。文字通り浮きを遊ぶものである。ふわりともゆらりとも言えるが、ふゆうの響きが好きだから私はこう呼んでいる。

肩からつま先まで暖かな空間に包み込まれ、じんわりと熱が浸透していき、強張った筋肉は顔をほころばせる。

湯口からこぼこぼと流れてくる源泉の音がまた心地よく、呼吸するたびに雑念が抜け出していき、至福の心持ちへと誘う。

湯に映る光は線香花火のように爆ぜ、蜃気楼のように揺らめいていた。

しばらく、今しばらくと浴していると、軟弱な肉体は精神に対し次第に泣き言をほざき始める。「のぼせる」と。

湯からあげた手を広げてみれば皺だらけ、成る程時は来たれり。引き際は肝心であるゆえ、火照る身体を湯船から這い上がらせる。

なんと重たい、度し難い生き物だろうか。そこにいたのは地上に、現実には、社会に戻るという手枷足枷をつけられた哀れな社会的動物であった。

脱衣所において入念に身体を拭き終えたところで、自販機が目に入る。

吃驚仰天、ここは瓶牛乳の生き残りがいるのか。では、いただかなければ無礼千万。小

錢を突っ込み重い音ともに自販機から現れたフルーツ牛乳瓶を一気飲みし、夢見心地を堪能する。

さて、客室に戻るとしよう。「ゆ」の暖簾をくぐり、後ろ髪引かれつつ浴場を後にする。ふと見ると、下駄箱から我がスリッパがなくなっていた。

オヤッ。笑止、多大なる覚悟の元この地上に舞い戻ってきたというのに、こうも簡単に地に着ける足すら奪われてはお手も上げようというもの。

まあよしとしよう。健全な精神は健全な肉体に宿るというではないか。この程度気にするほどでもない。

理性はそう言うが感情はそうではないらしい。自然と足は浴室へと向き、心は二回目のふゆうを、喉は二杯目のフルーツ牛乳を求めていた。